

資料

臼杵藩稲葉家年中行事に用いられた食品・食物

—同藩祐筆日記を資料として—

江 後 迪 子

(別府大学短期大学部)

平成6年4月21日受理

Food in the Annual Events in the Inaba Family of the Usuki Clan
—The Diaries of the Secretaries of the Usuki Clan—

Michiko Ego

Beppu University Junior College, Oita 870

Keywords: food 食べ物, annual event 年中行事, diary 祐筆日記, Usuki Clan 臼杵藩, Edo and Usuki 江戸と臼杵.

1. 緒 言

臼杵藩稲葉集の祐筆日記(御奥日記)は享和元年(1801)より明治14年(1881)までの80年間(文政9欠落)171冊,延べ120年分が臼杵市立臼杵図書館に所蔵されている。その内容は日々の動静をはじめとしてほとんど毎日詳細に記されていて,江戸時代の大名の生活の様相を知ることができる。とくに,享和元年(1801)より嘉永5年(1853)までの51年分は江戸屋敷の記録であり,江戸の様相を解明するための貴重な資料であるといえる。

わが国の年中行事は江戸時代にその基盤が形成され,現在まで伝承されてきているとされる。本報は祐筆日記の概要および稲葉家における年中行事およびそれにかかわる食物について調査することを主眼とした。

2. 調査史料および方法

本資料は江戸上屋敷(以下上屋敷とする)および役所(以下江戸役所とする),江戸下屋敷(以下下屋敷とする),江戸鼓屋敷,臼杵城および役所(以下臼杵屋敷および臼杵役所とする),臼杵米山屋敷(以下米山屋敷とする)に分類される。その内訳は表1のとおりである。文政9年についてはいずれの屋敷も記録が

ない。臼杵役所の記録は1年を上下に分けた半分のものが多い。江戸鼓屋敷についてはその所在および居住者が不明であり,また明治8年以降の4年分については記載内容が少ないため,これらの6年分を除いた江戸期を主とした114年分について調査対象とした。

調査方法は全資料を通読し,屋敷別,地域別に分類し,稲葉家御奥の組織および実施された年中行事とその変遷について調査した。また武家階層および庶民階層における年中行事との比較のため『御城之年中行事』¹⁾,『町中年中行事』¹⁾,『武家年中行事』¹⁾,『増補江戸年中行事』¹⁾と江戸後期の各地の生活調査である『諸国風俗問状答』²⁾等と比較した。ただし,『諸国風俗問状等』²⁾には臼杵の回答はない。

3. 調査結果および考察

(1) 祐筆日記の概要

臼杵藩稲葉家は,領知5万石余で廃藩置県まで15代の藩主が藩政にあたった³⁾。屋敷別,地域別,居住者別分類は表2のとおりである^{4)~6)}。

上屋敷は藩主およびその室が,下屋敷は本資料の場合は隠居後の11代雍通公およびその室が居住している。江戸の上屋敷と下屋敷との距離は直線で1.2 kmと近

表1. 臼杵藩稲葉家祐筆日記分類

屋敷別	江戸上屋敷	江戸役所	江戸誠感院屋敷	江戸下屋敷	臼杵城	臼杵役所	臼杵米山屋敷	計
年代	享和元～文政3 天保6～天保14	文化11 文化14 天保9 天保11 弘化元 弘化3 嘉永元*	弘化元～嘉永5 嘉永6*	文政2* 文政4～弘化 (文政9欠落) 弘化3	文政8* 弘化4 安政元～安政6 文久元～文久3 慶応元～明治2 明治3～明治5*	嘉永2～嘉永6* 安政2* 安政5* 万延元* 文久元～明治元 明治2*	嘉永2* 嘉永3* 安政2～安政4 文久3～文治元 明治2*	
年数	29	7	10	25	18	17	8	114

享和元年(1801)より明治8年(1875)までの分類。 *1年分ないもの。

表2. 臼杵藩稲葉家祐筆日記屋敷別概要

屋敷	江戸上屋敷 ²⁾	江戸役所	江戸誠感院屋敷 ³⁾	江戸下屋敷 ²⁾	臼杵城 ⁴⁾	臼杵役所	臼杵米山屋敷 ⁴⁾
屋敷の所在地	港区西新橋		不詳	港区麻布台	臼杵市丹生嶋		臼杵市海添
屋敷の広さ	1,805坪		不詳	3,480坪	不詳		不詳
居住者	11代雍通と室 12代尊通と室 13代幾通と室		清昌院(幾通実母) 誠感院(幾通室)	11代雍通と室	13代幾通と側室 14代観通と側室 15代久通と側室		慶昌院(観通実母) 国清院(観通の室) 至徳院

く⁷⁾、頻繁な行き来がみられる。資料の中心は11代雍通の上屋敷(24～44歳)および隠居後71歳で亡くなるまでの下屋敷の記録である⁸⁾。ただし、下屋敷は弘化4年(1847)11代雍通の死の前年より記録はない。

表1の江戸役所および臼杵役所の所在ははっきりしないが上屋敷および臼杵城にあったと推察される。表1以外にも中屋敷、鼓屋敷、原庭屋敷、渋谷屋敷、大坂屋敷、米山屋敷などが本資料中に散見され、原庭屋敷、渋谷屋敷は別邸、大坂屋敷は蔵屋敷として利用されたいが、これらの屋敷についての詳細は不明である。

なお、幕末には江戸に居る殿様より世上不穏との書状が臼杵へ送られたりしている。そして、慶応年間には定期的な参勤交代の制度が崩れかけていたのか、殿様は臼杵城に居ることが多くなっている。そのため、江戸屋敷の記録は少なくなり、藩制の終りを感じさせるのである。

(2) 稲葉家御奥について

稲葉家の御奥の組織は年代によって多少の変動はあるが、およそ表3のとおりである。資料中には「御表より…」という記述が随所に見られることから、いずれの屋敷においても表と奥とがあることが裏付けられるものの、表の史料はない。

稲葉家の御奥は表3の人員構成等から江戸城大奥と似た組織であったと推察される⁹⁾。それぞれの時代に住んでいた人に対して御側が付いていたようで、享和元年(1801)にはお姫様御附、奥様御附、大奥様御附、若殿様御附というように役割分担をしていた。

上屋敷と下屋敷を比較すると、上屋敷に比べ下屋敷はやや規模が小さい。臼杵の米山屋敷はその屋敷の規模・組織などから、臼杵における下屋敷と考えられる。

(3) 年中行事について

稲葉家において行われてきた年中行事にはさまざまなものがあるが、五節句(1月7日=人日, 3月3日=上巳, 5月5日=端午, 7月7日=七夕, 9月9日=重陽)¹⁰⁾および関連行事とその他の行事に分けて検討した。五節句の中の人日については江戸時代に正月7日諸候が江戸城に登城し、七種粥を祝食した¹⁰⁾とされているが本資料には「七種御祝儀」とあった。正月の行事は年末の迎春行事から始まるので、年末の煤払、餅つき、歳暮、年越しおよび正月三か日、御買初、七種をまとめて迎春関連行事とした。その他の行事としては鏡開き、とんど焼、初午、彼岸、氷室、嘉祥、土用・暑入、盂蘭盆、中元、生身玉^{いきみたま}、虫干、八朔、月見、玄猪、冬至、寒入、お事初め、節分などがみられた。これらの行事について次に述べる。このほか八天狗祭、

白杵藩稲葉家年中行事に用いられた食品・食物

表3. 白杵藩御奥の人員構成

役 職	屋敷別人数(人)			
	上屋敷 (1846)	下屋敷 (1839)	白杵城 (1861)	白杵米山 (1846)
御家老	1		1	
御小姓頭			2	
御用達	2		1	
御用人		不詳	1	
御附	2		2	
御医師	2		2	
御内所附	2		1	
老女			1	
中老			1	
御側			3~4	
御次				
御中居	15	11	2	14
御末			2	
御半下				
下女				
御蛸				
御賄人			3	
御料理人			2	
御口番	4	不詳	2	
御小姓両番			2	
手明	1		2	
小使	7		6	
釜屋				
御菜園方(白杵)			5	
合計概数	36	24	41~42	34

甲子等の行事も散見された。

年中行事についても、文久3年(1863)頃より「五節句のお召し替えなく平日の通り」との記録が見られたり、変革のお触れが白杵にも伝わっていて、幕末になるに従って簡素化されていく様子がわかる。

また、いずれの行事も仏事(法事を含む)があった場合には、中止または延期されている。

1) 五節句および関連行事

i) 迎春関連行事

迎春関連行事は表4のとおりである。以下個々の行事について述べる。

a. 煤払：新年を迎える準備は煤払に始まる。煤払は12月の初旬からいくつかの部屋ごとに行い、煤払を終えて12月13日には煤の御祝儀が行われる。これは年男が煤竹を持って各部屋をまわり、その後お粥(白粥)や雑煮、酒、吸物、数の子などの祝い膳を一同で祝う

ものである。

明治元年(1867)白杵役所の記録には「平日より一菜増」とあり、平皿として田作り、ひらき豆、御雑煮として餅、くしこ、串貝、結昆布、大根、里いも、焼豆腐、御吸物にはひれ、御肴として数の子三方敷紙とある。

『諸国風俗問状答』²⁾の雑煮の具としては大根、牛蒡、人参、里いも、こんにゃく、焼豆腐など植物性のものがほとんどである²⁾。

天保9年(1838)12月11日江戸役所の記録には、煤払として投みかん150、以後天保の後半にかけみつかんまきの記録も多くみられる。この投みかんみつかんまきは同一のものと推察される。また同年同日に「蕎麦切惣女中へ下される」という記録がみられ、その後も続いていて、年越しの蕎麦の習慣がこの頃から始まったのではないかと推察される。

煤払について屋敷別にみると、享和元年(1801~1803)ころの上屋敷初期日記には記録がみられず、江戸役所日記の文化11年(1814)12月13日の条に初めてみられる。文政4年(1821)以降には、いずれの屋敷においてもほぼ毎年行われており、その様式もほぼ同じである。

煤払については庶民との比較の結果²⁾、武家層と庶民層のいずれにおいても実施されている行事ではあるが、庶民の場合の煤払には粥や雑炊、雑煮などは大和国以西でわずかに見られるのみである。

b. 餅つき：12月21日または22日に餅つきが行われている。江戸屋敷においてはいずれの屋敷にも屋敷内で餅つきをした記録はなく、文化11年(1814)江戸役所には「例年の通り壺屋に申し付け」とあり、餅屋に依頼していたことがわかる。同じく弘化3年(1846)江戸役所には、誠感院様(13代幾通の正室)年始御用の御居餅(上赤下白)として一尺のものおよび菱餅一重三飴、また大殿様用として八寸の御居餅および菱餅三飴、また殿様、奥様、姫様用などにもそれぞれに御居餅が用意されている。この御居餅は、弘化元年(1844)江戸役所では「殿様の御留守年に付御奥に御飴に相成」と殿様の御留守年には奥のみで行事が行われたことが記されていて、殿様の留守年は行事が簡略化されていることがわかる。

また御飴用の餅として神前、這子、土蔵、雪隠等にそれぞれ一~二重、大居間には十七居り、仏前には白のみ、その他のし餅、なまこ餅、かき餅などを手配している。このことからして役所は行事の段取りや手配

表4. 稲葉家における五節句関連行事—迎春

種 類	月 日	内 容	食 物 等
煤 払	12/9～12	惣中で煤竹で掃除	蕎麦切 みかん・投みかん
煤の御祝儀	12/13	煤払済み	御臈煮（餅 くしこ 串貝 結昆布 大根 焼豆腐） 平皿（田作り ひらき豆）吸物（鯛ひれ）数の子 酒 海干
餅つき	12/21～22	釜係他へ 餅米量 御居餅	餅米1石、粟6升（御二方分） 餅米8斗（両女中分） 神前（赤白）、仏前（白）、荒神 御身尺御居餅、かき餅、作り餅
歳末御祝儀	大晦日	年蔵し御祝御膳 注蓮飾り 御身尺御居餅 神前、仏前御居餅（うら白 ゆずり葉） 御役所御居餅（折敷） 御雪隠御居餅（折敷に田作り） 蓬菜飾り	御重 一 さざい 二 数の子 三 煮豆 余 たたき牛蒡 五 照煮ごまめ 屠蘇 伊勢海老 串柿
元 旦		御若水 乳香水 御家中登城御祝儀 大服 殿様御具足御召初 御表御礼・御奥御礼 家老以下順次年始	朝御雑煮御膳夕御膳（1～3日御表より） 御雑煮（餅 くしこ 串貝 結昆布 大根 焼豆腐） 干鯛 御手のし
御買初	1/2	御用達より献上（金子頂戴）	いな さざい ほうほう 芹 蕪 人参 麩 昆布 麻芋
七 種	1/7	若菜御祝儀	七種御粥（御表より）

を行っていたといえる。

紅白の御居餅は、宮中の年中行事の様式を記した『御定式御用品雛形』¹¹⁾ および勧修寺家伝来とされる類似の文献¹²⁾などに倣ったものであると考えられ、江戸幕府についても江戸の御用菓子司金沢丹後の『幕府大廣間外飭付御鏡餅』もほぼ同じ様式である¹³⁾ことからすれば、江戸幕府は宮中などのしきたりを規範としていたものと考えられる。庶民も鏡餅を飾る習慣があった。

臼杵の場合の餅つきは臼杵城内は表・奥別々に、また米山屋敷においても屋敷内で餅つきをしている。安政2年（1855）臼杵役所によれば供える場所がやや簡略化されているものの、用いた餅米の量は一石3斗5升到及んでいる。餅つきはいずれの屋敷も明治2年

（1869）までほぼ同様に行われている。

庶民の餅つきは『東都遊覧年中行事』（1851）¹¹⁾によれば「12月26日、27日此頃迄にもっはら餅つきあり。賃銭にて餅屋に搗せるを賃餅といひ、釜を持ありきて搗を引づり餅といふ。…」とあり、江戸では武家も庶民も餅つきはこのどちらかであったと推察される。庶民の餅つきの日取りは12月23日から28日頃までである²⁾。

c. 歳暮：歳暮祝儀は12月末に行われ、御用達をはじめ側など屋敷詰めの人々に歳暮を配っている。記録の初期享和元年（1801）には12月28日に「いつも御酒下されし所、当年より御目録に相成」と貨幣経済が進んでいく様子がうかがえる。また家族同士また子女の嫁ぎ先や親戚などへ、またその逆についても干鯛および御居餅（御鏡餅）のやりとりがみられる。

臼杵藩稲葉家年中行事に用いられた食品・食物

歳暮は江戸においても臼杵においても、いずれの屋敷も12月28日に行われていることが多く、明治2年(1869)まではほぼ同様に続いている。

d. 年越し：年越しは歳末御祝儀と書かれている場合もある。年越しは節分と同一日の場合や、1月6日および1月14日にも行われているが、ここでは歳末の行事のみに限定して考察する。現在除夜は一年の最後の夜であるが、もとは新年最初の夜として夕日が沈むとおせち料理を神前に供え家族も食べていた²⁾。資料では年越しは12月末から1月初旬までに行われ数の子、酒や重詰めのおせち料理を食べて祝っている。また屠蘇用のみりん酒も用意されている。この重の内容は『諸国風俗問状答』²⁾の問いには「数の子、田づくり、たたき牛房、煮豆等通例…」とあり、稲葉家の場合は表4のごとく御重は五段で、一さざい、二数の子、三煮豆、四たたき牛房、五照煮ごまめで、ほぼ同じく文化年間にはこのようなおせち料理が官民ともに定着していたと考えられる。また文政4年(1821)下屋敷では、12月30日に「更科そば16せいろ上る」とあり年越し蕎麦の習慣がみられ、その後日記に年越し蕎麦に関する記載が多くなっている。

屋敷別にみると江戸屋敷では蕎麦以外の食べ物の記録はみられない。一方、安政2年(1855)臼杵役所には「御年越しに付御祝儀膳」が表より奥へ下されているが、米山屋敷ではみられない。

年末に蕎麦を食べる習慣は煤払にも見られ、文政以降定着している。

e. 正月三が日：元旦は上屋敷では朝卯の刻前、奥様に乳香水および若水を差し上げた後、奥様は表の御具足を拝見、蓬来、大福を上がり、続いて御雑煮御祝御膳を祝う。

服装については、殿様は五節句のしきたり通り(詳細は不明)、奥様の髪形は1日、2日、3日共長かもじ、着物は1日は地黒、2日は地白、3日は地赤とされている。奥女中の髪形は老女、中老は長かもじ、御側は中かもじ、御次は志さげと身分差がある。

元旦の祝膳については、上屋敷の場合例年ほぼ同様の形式であり、天保7年(1836)の例はおよそ次のようである。奥様は表より差し向けられた御雑煮御祝御膳を上がった後家老などから順次年始御祝儀を受ける。その折、干鯛のやりとりがある。奥様からは御側等へたばこ入れ、杯、屠蘇などが、子供には千代紙、手遊びなどの年玉が渡されている。

正月には殿様の登城がある。五節句および八朔には

江戸城への登城が義務づけられていたが、稲葉家の場合は外様の小藩大名であり、正月2日の登城であった。殿様が江戸にいる年、江戸役所の文化14年(1817)の場合は「殿様今朝六つ供揃え登城」とあり、殿様が臼杵の場合には名代が登城している。

また正月2日には初事が行われ、記録には御掃初、御書初および後に述べる御買初などがみられる。

正月三が日は朝夕の御祝御膳が表より奥へ届けられる。これら正月の様式は江戸役所、下屋敷、臼杵城、米山屋敷のいずれにおいても、明治2年(1869)まではほぼ同様に行われている。

f. 御買初：「買初」とは、商家で「売初」、消費者にとっては「買初」で、正月2日の初事¹⁴⁾である。御買初の品物は年によって多少の差異はあるが、いな、さざい、ほうぼう、芹、かぶ、人参、麴、昆布、麻芋などをお屋敷出入りの商人が納めるもので、御屋敷からは鳥目、酒、数の子を頂戴している。宮中での御買初の品目としてはわけぎ、いわし、数の子、あめ、押味噌、おこし、ところ、塩、穂俵、榎、搦栗、昆布、串柿、濁酒などであり¹¹⁾、稲葉家の場合とはかなり異なっている。御買初は江戸においては役所以外にはほとんどみられないが、臼杵ではいずれの屋敷にも記載があり、明治2年(1869)まで行われている。

庶民の場合、御買初は行われていない。

g. 七種：七種の祝儀は1月2日同様殿様の登城日である。

七種については、上屋敷では若菜御祝儀の記載はほぼ毎年みられるが、享和4年(1804)の例では臈煮という記載があるのみで、文政3年(1820)までの記録には粥の記載はみられない。

粥が出現するのは幾通の代の天保14年(1843)以降からで、「御粥、御表より」との記載がみられる。下屋敷においては七種祝儀とはあるものの食べ物の記載はない。臼杵城においては最初の記録である文政7年(1824)から七種の品、または七種粥がみられる。米山屋敷では資料の半数に記録がある。全資料から、七種粥は天保の終りになって定着した行事ではないかと推察される。雑煮および七種の行事は『諸国風俗問状答』²⁾では各地で行われていて、官民ともに定着していたと推察される。

ii) 上 巳

上巳の祝儀も殿様の登城日である。

上巳とは3月3日の雛節句のことで、その概要は表5のとおりである。3月1日頃から親類同士蛤や貝づ

表5. 稲葉家における五節句関連行事—上巳

種 類	月 日	内 容	食 物 等
雛建て	2/28	雛棚作り（大工2～3人） 毛氈・幕 雛飾り（惣女中）	
上巳御祝儀	3/1		蛤一台 貝尽し 夕御膳 白酒 菱餅
上 巳	3/2	雛様へ 御二方様へ 壺屋より	雛へ朝夕御膳 干菓子・餅菓子 雛御用みりん酒2升 朝夕御祝御膳（御表より） 一統へ酒，吸物，肴 菱餅三飾ずつ 菱餅一飾ずつ 菱餅二飾 餅菓子 提重 御膳二汁五菜 干菓子 けし梅 みりん酒一陶 白酒 餅菓子下され 餅菓子下され
	3/3	殿様へ御祝儀 御家中登城御祝儀 神前・仏前 御二方へ 雛様へ	
	3/4	雛拝見	餅菓子下され
雛しまい	3/5～6	雛様へ	夕御膳蕎麦切供え

くしのやりとりをする。初雛の場合，家老からは白酒，側からは内裏一對とか人形等が献上されている。2月末には大工による雛建て，次いで蔵から出した雛人形を御側総出で飾りつける。その御雛様へは菱餅を，3月1日から3月3日までは雛へ朝夕二汁五菜の御膳を供える。また菓子の四段重を供える。

3月3日には家老・御用達・御医師などが列席して，蛤吸物他御料理と御酒を，また惣女中や部屋方女中にも御料理，御酒，菓子等を下さっている。雛が飾ってある間には御側やそのこども達が御屋敷を訪れ雛拝見をし，お菓子を頂戴している。

雛をしまうのは3月5日または6日で，その前日の夕御膳は蕎麦切を供えている。上巳の節句に蕎麦切がみられるのは本資料では文化14年（1817）以降である。

上巳の節句は江戸・臼杵いずれの屋敷もほぼ同様に行われている。また，江戸時代には庶民の間でも雛節句が定着していたようであるが，近江国多羅尾村の場

合「初雛へ紙の雛を贈る」とあり，庶民の場合には質素な雛祭りであったといえる²⁾。

iii) 端 午

端午の祝儀も殿様の登城日である。

本資料における5月5日の端午の節句の概要は表6のとおりである。端午の祝儀における食べ物には粽および柏餅がある。粽は平安時代にすでに宮中行事の端午の儀式に用いられている古くからの食べ物であり，柏餅は江戸時代になって普及したとされている¹⁵⁾。

粽および柏餅を手作りする場合には前日までに多くの粉を挽く。年によっては粽のみが手作りされている。文化11年（1814）江戸役所では柏餅200個が壺屋に注文されていて，味噌入り柏餅も注文されている。また節句の前日には御屋根および各部屋に茅，菖蒲，よもぎを葺いている（軒にさす）¹⁰⁾。

5月5日には朝，御膳所表より粽が出される。初節句の家からは粽や柏餅が御屋敷へ献上されている。資

臼杵藩稲葉家年中行事に用いられた食品・食物

表6. 稲葉家における五節句関連行事—端午

種 類	月 日	内 容	食 物 等
端 午	5 / 2	粉挽き	節句御用 粉挽き役へ煎餅等下され
		壺屋へ手配	柏餅 200 一つ6文（江戸役所1814）
	5 / 4	御屋根に菖蒲・よもぎ・茅	
	5 / 5	殿様へ御祝儀	朝夕御祝御膳（御表より）
			柏餅
		大殿様・大奥様	粽 5本ずつ
		殿様・奥様・姫様	粽 5本ずつ
		神前・仏前・荒神	粽 3本ずつ
		御人形	粽 3本
		一統へ	粽
		御二方へ	柏餅30ずつ
		一統へ	柏餅

表7. 稲葉家における五節句関連行事—七夕*

種 類	月 日	内 容	食 物 等
七 夕	7 / 6	短冊かざり	
		短冊竹 大小10本	
		五色紙 115枚	
		（赤35 青黄もへぎ白各20）	
		（紙簇 瓢箪 梶葉 ひな形 短冊）	
	7 / 7	七夕御供	瓜 西瓜 素麺 御居餅 神酒 （ほおずき 五色絹糸 御花）
		御家中殿様へ御祝儀	朝夕御祝御膳
			四時 素麺・刺鯖上がる
	7 / 8	神前・稲荷へ	神酒
		竹流し	

* 七夕御供：茄子，桃，真桑瓜，長そうめん，長ささが用いられている場合あり。

料のはじまる享和元年（1801）上屋敷には「虎太郎様（後の12代尊通）初節句につき兜一筋」の記録もある。また同年より端午御祝儀として干鯛が用いられているが，文政10年（1827）以降は簡略化のためか見られなくなる。屋敷別には江戸・臼杵のいずれの屋敷においても柏餅・粽が見られ，明治2年（1869）まで続いている。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合からみて，江戸後期には菖蒲・蓬をふき，食べ物では粽や柏餅を用いることが定着していたといえる。

iv) 七 夕

七夕の祝儀も殿様の登城日である。

七夕についての概要は表7のとおりである。七夕飾

りは7月6日に竹を建て，短冊飾りとお供えをしている。7月7日には七夕御祝儀として朝夕御膳が出されている。七夕は，江戸・臼杵いずれの屋敷においてもほとんどに記録がみられ，明治2年（1869）まで続いている。

七夕の飾りについての記録は役所にのみ見られ，竹や色紙の手配をしている。

七夕に素麺を食べる風習は，索餅を食することが転じたとされる¹⁴⁾が，江戸時代には定着していたようで，本資料の場合も夕御膳に素麺と刺鯖が出されている。

『諸国風俗問状答』²⁾における七夕は武家とほぼ同様に行われている。

v) 重 陽

重陽の祝儀も殿様の登城日である。

重陽についての概要は表8のとおりであり、文政7年(1820)までは祝儀に干鯛が用いられているが、その後は見られなくなる。江戸役所の記録では、文化11年(1814)には赤飯が神前、仏前、荒神、這子等20カ

表8. 稲葉家における五節句関連行事—重陽

種類	月日	内 容	食物等
重陽	9/9		朝夕御祝御膳 朝むかご御飯(御表より) 三方盛菊のし 里いも汁(惣中へ)
		殿様へ御祝儀	干鯛
		神前・佛前・荒神等へ	赤飯 肴 御居餅

所へ供えられているが、天保11年(1840)には記載がなくなり、この頃から簡略化されたと考えられる。しかし臼杵においては明治2年(1869)まで行われている。むかご飯の記録は臼杵役所においてみられる『江戸府年中行事』¹⁾によれば重陽には菊酒が用いられるとあるが、本資料にはなく、天保9年(1838)江戸役所には栗御飯が見られ、栗を用いる風習¹⁴⁾があったと考えられる。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合、菊酒や赤飯が散見される。

2) その他の行事

その他の行事については、稲葉家の変遷をまとめて表9に示した。個々の行事についてその概略を次に述べ、『諸国風俗問状答』²⁾の問いにある行事についてはその比較を行った。

i) 鏡開き(具足開き)

鏡開きは上屋敷の文化3年(1806)、同4年(1807)

表9. 稲葉家における五節句以外の行事

行事名	屋敷別					
	江戸上屋敷	江戸役所	江戸下屋敷	臼杵城内	臼杵役所	臼杵米山
御鏡開き	△	○	○	○	○	○
上 元	×	○	△	△	○	△
とんど焼	×	+	+	△	○	△
初 午*	○	○	○	○	○	○
彼 岸	×	×	×1回	○	○	○
氷 室	×	×	△	×	○	×
土 用	×	○	△	△	○	○
暑 入	△	△	△	○	○	○
嘉 祥	△	△	△	×	×	×
孟 蘭 盆		○		×	○	×
中 元	△	△	×	△	△	×
生 身 玉*	○	○	○	○	○	○
虫 干 し	+	○	○	○	○	○
八 朔	-	×	△	×	△	△
月 見*	○	○	○	○	○	○
後の月見	-	○	○	-	○	○
玄 猪	○	×	○	△	○	△
冬 至	+	○	×	×	△	×
寒 入	+	○	○	△	○	△
煤 払*	+	○	○	○	○	○
御事始め	×3回	×1回	×	×	×	×
餅 つ き	+	○	×	○	○	○
節 分	+	○	+	△	○	×

○：ほとんど記録あり，△：ときどき記録あり，×：ほとんど記録なし，+：時代が下ると記録あり，-：時代が下ると記録なし，* いずれの屋敷にもあり明治まで行われている行事。

臼杵藩稲葉家年中行事に用いられた食品・食物

の2年間にはみられるが、食べ物の記載はない。その後の下屋敷では文政10年(1827)以降はほぼ毎年みられるようになる。資料には殿様が元日に表で御具足をお召しになるという記録があり、表の御具足の前の居餅を下げることを具足開き、その他を鏡開きと区別しているようである。資料の鏡開きの日は江戸・臼杵いずれの屋敷も1月11日で、汁粉餅にしている。

『諸国風俗問状答』²⁾における鏡開きはほとんど1月11日で汁粉餅または雑煮が用いられている。

ii) とんど焼

とんど焼についての記録は天保5年(1834)以降、上屋敷で多くみられるようになる。臼杵においてもほぼ毎年みられる。その内容は「とんど焼かちん上ル」がほとんどであるが、臼杵役所では「とんど焼餅、松竹のし包み三方居」という記録もみられる。実施日は1月15日である。この日には江戸・臼杵とも餅や小豆粥を祝っている。

『諸国風俗問状答』²⁾においても、とんど焼または左義長として行われている。

iii) 初 午

初午は旧暦2月最初の午の日の稲荷の祭で、『江戸年中行事』¹⁾に「諸所の稲荷の社、或は屋敷町屋の鎮守の宮に、五采の幟をたて奉幣し、神楽を奏す。とりわけ江府は稲荷の社多き所にて参詣群衆の人涌がごとし…」とその様子が書かれている。初午は江戸・臼杵のいずれの屋敷においても、明治4年(1871)まで行われている行事である。初午における食べ物は江戸も臼杵も同じく、神前に神酒、赤飯、菜からしあえが供えられる。油揚げ、魚を供える稲荷もある。一同には赤飯、菜からしあえを下される。

『諸国風俗問状答』²⁾の初午には赤飯、はぎの餅などが散見される。この中で淡路国の初午は稲葉家と同様赤飯、菜からしあえが用いられている。

iv) 彼 岸

彼岸については、江戸屋敷のいずれにも記録がない。一方、臼杵では春と秋の彼岸に牡丹餅(はぎの餅)が作られお供えされたり、一統へ配られている。江戸において記録のない理由ははっきりしないが、今後さらに検討すべきことと考える。

『諸国風俗問状答』²⁾の彼岸は、団子またははぎの餅が用いられているところが多い。

v) 氷 室

『東都遊覧年中行事』¹⁾には6月1日に「賜氷の節御祝儀、加州公より氷献上」とある。また『御城の年

中行事』¹⁾には「富士氷御祝」とあり、氷を献上する行事である。しかし、旧暦の6月に氷を献上することは当時の状況からして大変なことであり、氷が転じて氷餅を食べるということになったもので、本資料においても文化11年(1814)江戸役所には「今朝、例年の通り氷餅…」とあり、下屋敷では文政8年(1825)より「氷餅上ル」とある。江戸役所および臼杵役所共に行っていた行事である。氷室は明治2年(1869)まで行われている。

『諸国風俗問状答』²⁾には、記載されている例証が皆無に近い。

vi) 嘉 祥

嘉祥とは6月16日に菓子を賜る行事で、京都では後嵯峨院の頃(1242～)から行われていたとされる¹⁶⁾。

資料において嘉祥が初見されるのは、文化13年(1816)で「小石川より御嘉祥御重」とあり、以降15回見られる。しかし、臼杵藩御会所日記には天和3年(1683)以降8月1日の八朔の日に「嘉祥御菓子頂戴」との記録がみられ、安政3年(1856)までに54回行われている¹⁷⁾。

この嘉祥がいつ頃から行われていたかについては、稲葉家譜に「延宝3年(1675)八月朔日…皆登城…是儀式始於此時…是日八朔頒賜嘉祥菓餅於諸士。是六月十六日景通於幕府所賜之物也…」とあり、五代景通の時より行われ、以後の歴代藩主が家督引継ぎ後初めて6月16日に登城するときには、記録が見られるようになる¹⁸⁾。

このことからすれば、世上が安定したこの頃から行事が確立されていったのではないかと考えるのである。

嘉祥には多くの菓子が用いられたとされるが、文政元年(1818)に江戸城で用いられた菓子は1,612膳、総数14,484個と膨大なもので¹⁹⁾、嘉祥の行事は菓子の普及に著しい影響を及ぼしたといわれている。資料における嘉祥は、文政4年(1821)以前にはみられず、その後の記録の半数程度にみられる。臼杵屋敷における出現は数回程度である。

したがって、本資料の記録には少ないものの、嘉祥の行事は幕府をはじめ臼杵藩の重要な行事であったといえる。これに対して『諸国風俗問状答』²⁾には嘉祥は全くみられず²⁾、このことから幕府主体の行事であったことがわかる。

vii) 土用・暑入り

土用の入りに小豆とにんにくやあんころ餅(またははぎの餅・赤の餅等)を食べるという風習²⁾は江戸時

代にかなりの地域で見られるが、本資料の江戸上屋敷では弘化2年(1845)から、臼杵では文政7年(1824)以降ほとんどみられる。江戸においては天保期まで記録がみられず、その後になって出現することは、この習慣が江戸末期になって定着したのではないかと考えられる。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合淡路国、阿波国などでは稲葉家と同じく小豆とにんにくが見られ、これを水で飲み暑邪を払うとしている。

viii) 干 蘭 盆

先祖の霊をまつる精霊祭は7月13日から15日にかけて行われている。江戸・臼杵とも役所に記録がみられ、7月13日には精霊棚をつくり、食べ物では長なす、干菓子、団子、菓子瓜、西瓜および御膳などが供えられている。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合も、団子、素麺、瓜、西瓜などを供えるところが多い。

ix) 中 元

中元とは7月15日に行われる行事である。この日蓮飯・刺鯖さしざばを食べ、神仏にも供えるという習慣は上屋敷の享和2年(1802)以降にみられるが、文化14年(1817)江戸役所には「下屋敷には蓮飯・刺鯖は当年より御止相成」と行事が簡略化され、文政年間に入ってから役所以外にはほとんどみられなくなる。蓮飯・刺鯖を祝うことは江戸中期『倭訓栞』²⁰⁾に見られ、江戸中期以前に多い行事のようである。臼杵においては明治初期まで続けられている。

庶民の場合『諸国風俗問状答』²⁾に「中元」という項目がないためか、中元についてはほとんど記載がない。

x) 生 身 魂いきみたま

生身魂とは中元と同じく7月15日に行われる行事で、嘉永4年(1851)の『東都遊覧年中行事』¹⁾に「生きている父母へ魚類を祝う」とある。資料では文化5年(1808)からみられ、その後いずれの屋敷においても明治2年(1869)まで行われている行事である。江戸においては単に「肴」との記録であるが、臼杵においては鯉や干鯖が多く用いられている。また文化14年(1817)江戸役所には、御用達をはじめ一統に干肴が配られている。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合、生身魂としては「刺鯖を親に贈る」という風習が調査対象のほぼ半数にみられる。備後国深津郡本庄村の場合は、「世俗盆に鯖・鮭の類を二親に供養となし、或は二親有者は十五

日には必さかなを喰ふ物と申て給へ申候」とあり、生身魂の行事は武家のみならず庶民にも浸透していた行事といえる。

xi) 虫 干

虫干は梅雨の明けた頃、6月末から7月末までの適宜に行われていて、享和年間および文化10年(1813)までは記載がなく、文化11年(1814)8月21日の江戸役所には、虫干済みに付茶飯、あんかけ豆腐、御酒、鉢肴が御奥惣女中、御用達、御医師、役所兩人(家老)へ、御口番、御手明、小使いへは湯豆腐、御酒が下されており、食べ物にも身分差が認められる。またその後にはすしや更科蕎麦、素麺、汁粉等も振る舞われている。天保11年(1840)江戸役所ではあんころ餅300という記録も見られる。

xii) 八 朔

八朔は徳川家康が江戸へ入った日として幕府の重要な行事に位置づけられており²¹⁾、殿様の登城日である。

『御城の年中行事』¹⁾によれば「8月1日には諸大名白衣着す」とある。また『新吉原年中行事』¹⁾には遊女も白無垢を着るとあり、歌川広重画『八朔白無垢』²²⁾(天保頃)にもその様が記されている。

本資料においても幕末まで重要な行事のひとつであり、慶応3年(1867)臼杵役所では「御家中一統登城」とあり、臼杵においても幕府を規範として行事が行われていたと考えられる。

八朔の行事における食べ物については、上屋敷の文化元年(1804)から文政3年(1820)までは干鯛のやりとりがみられるが、その後下屋敷には単に御祝または御祝料理とのみ記載されている。臼杵においても下屋敷と同様御祝料理とある。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合、少数に餅や赤飯で祝うところが見られる。

xiii) 月見および後の月見

月見は8月15日の十五夜、9月13日の十三夜²³⁾の前後に行われ、片月見を忌み2回の月見を行っていた、供物は団子、蛤、里芋、枝豆、果物等で江戸も臼杵も同様であり、いずれの屋敷においても行われている。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合、二回の月見を行うのは約半数の地域で武家とほぼ同様に行われている。

xiv) 玄 猪

玄猪は10月の亥の日に行われ諸大名は登城し、御祝の餅を頂戴していた²⁾。資料中の玄猪は、享和元年(1801)下屋敷から文化8年(1811)までは干鯛・御居餅のやりとりがみられるが、その後は御居餅のみと

臼杵藩稲葉家年中行事に用いられた食品・食物

なっている。臼杵では「赤白の鳥の子餅、仏前は白のみ」とある。玄猪はいずれの屋敷においても行われている。またこの日に炬燵開きを行っている。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合は、常陸国水戸領や丹後国峯山領の場合には五行をかたどり五色の餅が用いられているが、他の地域は餅またははぎの餅が多い。

xv) 冬 至

冬至は11月初旬から11月中旬に行われている。本資料中に冬至が初見されるのは文化14年(1817)江戸役所の11月15日で「冬至につき御臈煮」とある。同じく下屋敷にも散見される。天保8年(1837)上屋敷からは出現が多くなり、後年には汁粉もみられるようになる。臼杵においても同様に雑煮または汁粉がみられる。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合、冬至を行っている地域は少ないが、行う場合には餅をついている。

xvi) 寒 入

寒入は11月中旬から12月初旬にかけて行われている。寒入が初見されるのは、文化11年(1814)11月16日の江戸役所には「生揚げ、あんころ」とあり、その後赤の餅や湯豆腐、汁粉も出現している。臼杵では埋豆腐^{うずみどうふ}、はぎの餅等もみられる。

xvii) 事 初 め

事初めは12月初旬に散見され、いところ煮がみられる。庶民の場合も事初めはおよび事納めが散見される。食べ物ではお事汁やいところ煮がみられる²⁾。

xviii) 節 分

節分は立春の前日で、12月末または1月初旬に行われているが、天保2年以前はみられず、下屋敷の文政13年(1830)12月15日に「例年の通り」とあって、何らかの理由で記録されていないものの、実施されていた行事ではないかと考えられる。いずれの屋敷でも豆ばやし(豆まき)が行われ、安政2年(1855)臼杵役所では、『東都遊覧年中行事』¹⁾と同様、部屋ごとに鯛の頭がかざられている。

『諸国風俗問状答』²⁾の場合にも豆まきが行われ、鯛の頭、柊を門にさすというところが多い。

(4) 年中行事の性格

稲葉家で行われていた年中行事について述べてきたが、年中行事には大別して二通りのものがあるといえる。

ひとつは幕府を中心としたもので、地方の諸藩が幕府に倣って行っている嘉祥、氷室などの行事である。その他のものは、規模の大小は別として庶民においても行われている行事である。

年中行事については、『御定式御用品雛形』¹¹⁾に「正月御居御鏡餅」「正月2日御買初」「3月9日節句大菱餅」「3月9日節句貝餅」「端午粽」「中元刺鯖蓮飯」「八朔」「玄猪」などの宮中のしきたりが記されていて、これらの行事は稲葉家においてもほぼ同様に行われている。『御定式御用品雛形』¹¹⁾に記載されていて、稲葉家においてみられない行事は「お朝物」^{ひしはなびら}、「菱葩餅」である。

このことから、年中行事は宮中などの行事を規範として行われ、それが幕府から各藩へと、さらに庶民へと様々な変容とともに広まったのではないかと推察するのである。

(5) 各屋敷の役割

稲葉家の場合、上屋敷は在位中の殿様用の屋敷であり、下屋敷は隠居後の大殿様の居所であった。11代雍通は44歳で隠居後も臼杵に帰らず江戸に住んだ。それは、家督をゆずった12代尊通は三年後に21歳で病死し、次の13代幾通は6歳で家督をついだものの29歳で死去、このとき雍通61歳、さらに14代観通が家督をついだのは5歳であったというような状況から、後見人として江戸に住まなければならなかったのが理由と考えられる。

中屋敷については資料中に二回記録がみられるのみで詳細については不明である。

役所の記録は年中行事の段取りや食べ物の購入場所、数量、値段なども書かれている。たとえば餅つきの場合、総量および各人に配る鏡餅の数などがあることから、上屋敷、下屋敷および他の屋敷など江戸屋敷全体の事務所として位置づけられていたものと考えられる。

4. 結 語

臼杵藩稲葉家における年中行事について記録を検討してきたが、記録の存在する80年間のいずれの屋敷、いずれの地域においても年中行事はほぼ同じように行われていた。その行事の内容は、時代とともに簡略化される傾向がみられ、とくに五節句や八朔、玄猪などに多く用いられた干鯛や御居餅は文化末期頃から減少し、さらに文久に入ると振り袖禁止など様々な生活の変革に伴って、行事の内容にはかなりの変容が認められる。

稲葉家御奥の記録は、江戸における大名および家族の動静や行事、儀礼、食べ物など膨大な情報が得られると期待できる。それらについては今後さらに研究を深めたい。

本研究の一部は日本家政学会第45回大会において発表した。

本研究は平成5年アサヒ生活文化研究所より研究助成を受けて行った。ここに厚く御礼申し上げます。資料の閲覧に便宜をお計らいくださいました臼杵市立臼杵図書館ならびに解説にあたりご指導くださいました臼杵市立臼杵図書館元館長板井清一氏に深謝いたします。

引用文献

- 1) 三田村鳶魚(編):江戸年中行事, 中公文庫, 中央公論社, 東京, 13~173 (1981)
- 2) 竹内利美, 原田伴彦, 平山敏次郎(編):日本庶民生活史料集成, 第九巻, 三一書房, 東京, 453~827 (1969)
- 3) 木村 礎, 藤野 保, 村上 直(編):藩史大事典, 第七巻九州編, 雄山閣, 東京, 428~447 (1988)
- 4) 港区麻布台一丁目遺跡調査団(編): 郵政省飯倉分館構内遺跡, 港区麻布台一丁目遺跡調査会, 東京, 325~331 (1986)
- 5) 春藤武臺:臼杵時代考, 臼杵市立図書館蔵, 臼杵(1858)
- 6) 臼杵市史編さん室(編):臼杵市史上, 臼杵, 444~459 (1991)
- 7) 朝倉治彦(監修):江戸城下変遷図集, 第九巻, 原書房, 東京, 37, 73 (1986)
- 8) 不詳:稲葉家譜 No. 7, 臼杵市立図書館蔵, 臼杵(不詳)
- 9) 高柳金芳:江戸城大奥の生活, 生活史叢書7, 雄山閣, 東京, 13~20 (1989)
- 10) 半澤敏郎:生活文化歳事史, I, II, III, 東京書籍, 東京, 360 (1989)
- 11) 不詳:御定式御用品雛形, 京都市歴史資料館蔵(不詳)
- 12) 不詳:御定式御用品雛形, 俵屋吉富ギルドハウス蔵(不詳)
- 13) 金沢復一(編):江戸菓子文様, 青蛙房, 東京, 53 (1966)
- 14) 江馬 務:日本歳事全史, 臼井書房, 京都 (1949)
- 15) 中山圭子:和菓子ものがたり, 新人物往来社, 東京, 80~82 (1994)
- 16) 樋口喜一郎:江戸菓子雑話, 別冊太陽36, 平凡社, 東京, 61~62 (1981)
- 17) 江後迪子:別府大短大部紀要, 11号, 35~49 (1992)
- 18) 不詳:稲葉家譜 No. 3, 臼杵市立図書館蔵, 臼杵(不詳)
- 19) 大久保主水:嘉祥私記, 東京大学図書館蔵, 東京 (1818)
- 20) 古事類苑刊行会:古事類苑飲食部, 吉川弘文館, 東京, 1280 (1993)
- 21) 吉原健一郎, 大濱徹也:江戸東京年表, 小学館, 東京, 12 (1993)
- 22) 三谷一馬:江戸吉原図聚, 中公文庫, 中央公論社, 東京 (1992)
- 23) 西山松之助, 郡司正勝, 南 博, 神保五禰, 南 和男, 竹内 誠, 宮田 登, 吉原健一郎(編):江戸学事典, 弘文堂, 東京, 372~373 (1984)